

令和7年度岡山県脳卒中連携体制検討会議 議事概要

日時：令和7年10月7日（火）

18:00～18:45

Web開催（Zoom）

【報告事項】

（１）脳卒中の医療連携体制を担う医療機関等における令和6年度実績の集計について

（２）岡山大学病院脳卒中・心臓病等総合支援センターについて

【その他】

- ・ 脳卒中月間における広報について

1 開会

2 会長・副会長選出

検討会議設置要綱第4条による会長・副会長の選出について、事務局案により、会長に田中委員、副会長に榊原委員がそれぞれ選出された。

3 報告事項

【（１）脳卒中の医療連携体制を担う医療機関等における令和6年度実績の集計について】

○事務局

（脳卒中の医療連携体制を担う医療機関等における令和6年度実績の集計結果を説明）

○会長

第2次岡山県循環器病対策推進計画では、脳梗塞の新規入院患者のうち、t-PA療法を実施した割合を7.5%以上と目標を設定しているという話だったが、7.3～7.6%と推移してきていたところ、令和6年度は6.0%と下がっている。過去10年の統計からしても極端に低い数字であり、単年の値かもしれないので、今後の推移を見ていく必要がある。プラスに捉えたと、血栓回収を行う体制が各地域で整ってきたためt-PA療法を省略して、血栓回収を行っているということかと思う。急性期の機能を担われている先生方にご意見をぜひ伺いたい。

○委員

t-PAの件数が令和6年度少なかったことについて、単に昨年度だけが少なかっただけかもしれないが、血栓回収が広がってきたということも考えられると思う。血栓回収した症例で、t-PAを行う症例は1/4くらいになっており、以前より少ない印象。

t-PAを指標しているということは、積極的な治療の指標の一つにしようという意味合いがあると思うが、果たして今後もt-PAを指標として良いのか、血栓回収の件数も組み合わせた指標にした方が良いのか、検討が必要と感じている。

○委員

会長、委員がおっしゃられるように、血栓回収の体制が整ってきたということが大きいと思う。病態によっては、t-PAをスキップした方が成績が良いのではないかとということもだんだん明らかになってきている。とにかくt-PAの件数を増やせば良いという時代ではなくなってきたと思う。

ただ、当院ではそれでもt-PAを頑張っており、急性期脳梗塞の10%以上はt-PAを打っているが、高齢化も関係していて、打つと出血リスクを高め、さらに悪化させてしまうのではないかと患者も増えてきたように思う。

一次脳卒中センター(PSC)で毎年、t-PA療法と血栓回収の実績数、それから治療成績をまとめている。令和6年度の数字はまだ日本脳卒中学会からもらっていないが、もらえれば、お知らせしたいと思う。岡山県は、t-PA療法の成績が非常に良いということが従来からの特徴なので、その成績を保てれば良いと感じている。

○委員

脳梗塞の新規入院患者は増えているにもかかわらず、t-PAと血栓回収の件数を足しても、前年度より低い。確かに血栓回収は少しずつ増えているが、t-PAがこれほど減少することはちょっとおかしいと思う。当院でも昨年度はt-PAが少なかった。原因の一つに、現場でt-PAを控えているということも挙げられると思うが、もう一つの原因として、救急車で来る患者が減っていないかと思った。事務局に聞きたいが、前年度の救急車により搬送されてきた新規入院患者の割合はどうか。

○事務局

昨年度実施した調査では、57.9%が救急車による搬送であった。

○委員

前年度に比べ、令和6年度は低い割合であれば、救急車で来るというか時間通りに来る患者が少し減ったことから、t-PAを実施した割合が減ったのかなと思った。

○委員

当院のt-PAの件数が一番減っていると思うが、実際に現場を見た感じでは、81歳以上の患者が圧倒的に多くなってきており、高齢化についても影響していると思う。社会的な影響で独居老人が増えてきて、なかなか発見が遅れ、救急搬送時間が伸びているかもしれない。81歳以上の患者であれば、年齢だけで慎重投与項目が1つカウントされる。抗血栓薬を内服していたり、既往に脳梗塞があったりして、合併症を持っている方も増えているので、そういう意味で全体的にt-PAを投与できる患者は減っているという印象を持っている。

○会長

救急搬送という話も出たが、やはり独居老人が増えていたり、高齢化でなかなかt-PAの投与が難しい方が増えていく可能性は十分あると思うが、消防の現場ではそのような話があるのか。

○委員

消防としては、脳卒中か脳梗塞か見極めることが重要で、そこ後の治療についてはなかなか難しいと思っている。

○会長

t-PAや血栓回収の適応になる患者をピックアップするようなスコアリングは広島県等で行われているので、おそらく岡山県でも行われていると思うが、そういったものは使っているのか。

○委員

把握していないため、回答が難しい。申し訳ない。

○会長

こちらに関しては、委員の先生方にもお聞きしたいがいかがか。

○委員

以前から、岡山市立市民病院は使われていたと思うが、倉敷では以前、当院のKPSS（倉敷プレホスピタル脳卒中スケール）を使っていたが、血栓回収が広まり、つい最近、日本脳卒中学会が推奨しているLV0スケールに変えてみてはどうかという意見があり、試験的に消防とタイアップして行っている。

○委員

県南東部では、令和7年1月からLV0スケールで2点でも血栓回収ができる場所に積極的に搬送しようという取組が始まっている。ただ、それで患者が非常に増えたという印象は持っていない。

○会長

新見地域の医療機関からのコメントについては、地域の回復期の機能を担う医療機関を維持するためにも患者数が必要なので、県南の先生方はこのような意見があることを少し頭に入れて診療にあたっていただきたい。

【（２）岡山大学病院脳卒中・心臓病等総合支援センターについて】

○会長

厚生労働省の令和６年度のモデル事業に採択され、令和６年７月１日に岡山大学病院脳卒中・心臓病等総合支援センターを設置した。令和４年度からモデル事業が始まり、３年目で岡山県は採択された。脳卒中・心臓病等総合支援センターの運営を継続するかについては、県が予算をつけてくれるかどうかというところで、県の方にご尽力いただき、県からの補助金で今年度も継続して運営している。

岡山大学病院脳卒中・心臓病等総合支援センターとしては、相談支援や普及啓発、地域の医療気との診療連携を行っていく。相談支援については、人不足のため、新たな人材は配置していないが、当院の総合患者支援センターで脳卒中・心臓病等総合支援センターの看板を掲げ、相談を受けている。

昨年度の相談実績は資料のとおりになるが、新規患者のうち支援する理由となった原疾患の内訳について、心疾患が多く脳卒中はあまり相談がなかった。脳卒中側の啓発が不十分であったところもあると思うが、それより岡山県は各圏域がそれぞれ脳卒中の連携体制を整えて診療にあたっているところなので、岡山大学病院に脳卒中・心臓病等総合支援センターが設置されたからといって相談がくるというわけでもない。引き続き、岡山大学病院脳卒中・心臓病等総合支援センターの相談窓口については周知を図りたい。

具体的な事業内容だが、国の循環器病総合支援委員会の委員長である、宮本先生からは、全県的な急性期から慢性期へのシームレスな医療のサポート体制を整え、MSWの連携あるいはリハビリの連携、復職の支援をしっかりと取り組むよう言われた。おそらく岡山県の事情を推測するに、県南西部と県南東部と県北と各圏域にそれぞれしっかりとした基盤はあるが、それぞれの圏域でどのような取組を行っているのかという横のコミュニケーションは無かった。国が言われている取組に対して、岡山県が行うとすれば、岡山大学病院脳卒中・心臓病等総合支援センターが各圏域を繋ぐような機会を設けさせていただければと思っている。今年度の冬頃に、オンラインでMSWの方々に少しお集まりいただき、各圏域でどのように脳卒中診療のサポートをしているかをフリーディスカッション的に紹介いただきたい。それをまず第一歩にする方が良いと考えている。

今年度中には、国が整備指針を作成し、各脳卒中・心臓病等総合支援センターに共有されるということなので、整備指針に沿いながら適宜修正し、運営していきたい。脳と心臓で少しやりにくさもあったが、交通整理をし、脳卒中側は脳卒中側で予算をいただいている。当科の春間が窓口となり、いろいろ進める予定。私か春間から連絡がある可能性があるが、今後ともご協力のほどお願いしたい。

4 その他

【脳卒中月間における広報について】

○事務局

脳卒中月間の広報について、報告する。脳卒中月間に合わせて、ラジオ及びテレビ広報を実施し、県立図書館で脳卒中月間の連携展示を10月1日から同月22日まで行っている。また、昨年度に引き続き、世界脳卒中デーである10月29日に合わせて、岡山城及び県庁正面玄関ピロティ、新見市健康増進施設「げんき広場にいみ」を世界脳卒中機構のシンボルカラーであるインディゴブルーにライトアップする。

○委員

日本脳卒中協会も世界脳卒中機構と足並みをそろえて、10月を脳卒中月間と定めている。脳卒中月間に合わせて、岡山脳卒中市民公開講座をYouTubeに公開している。日本脳卒中協会岡山県支部のホームページから見るできるので、ぜひご覧いただければと思う。

○会長

岡山県立図書館は、全国の都道府県立の図書館の中で最も利用者が多い図書館と聞いたことがある。連携展示を行うことで、様々な方に普及啓発できると思われる。

以 上